

# ゲルク派小史 (下)

ツルティム・ケサン

小谷 信千代

## 二 ツォンカバの弟子たち

ツォンカバの直接の弟子は非常に数多くいるが、その主な者は、トクテン = ジャムノルギヤッオ (rTogs Idan hjam dpal rgya mtsho, 1356-1428)、ドウルジン = タクムキヤルツァン (hDul hdsin grags pa rgyal mtshan, 1374-1436)、キヤルツァブジ (rgyal tshab rje)、ケートツァブジ (mkhas grub rje)、ジヤムヤンチ (Jam dbyans chos rje 1379-1449)、ノブン寺の創建者、チャムチエンチ (Byams chen chos rje, セラ寺の創建者)、ジエンチ (ラブセンゲ) (rJe Ses rab sen ge, キュメ寺の創建者)、パンチエン = ゲドゥンツァブ (Pan chen dGe hdun grub, 第一世タライラ) たちである。ツォンカバの有名な弟子たち一四七人のことに関しては、ロンド、ルラマの全集の中

に出ているので、そこを参照されたい。<sup>①</sup>ここでは、ゲルク派の歴史の上で特に重要な弟子たちを、簡単に紹介するに止める。

### (一) キヤルツァブ

キヤルツァブ = ダルマリンチエン (rgyal tshab Dar marin chen, 1364-1432) は、ツァンテー (gTsan stod) に生れ、ネニン (gNas snin) の官長リンチエンキヤルツァブの許で出家し、ダルマリンチエンの名を与えられた。カーシーパ = リンチェンドルジエとレンダワとに依って聖教と理論の勝れた学者となった。サキヤやサンブ寺やツェタン寺など、十難解字 [Pramāṇavarttika, Abhisamayālaṅkāra, Madhyamakāvataṛa, Abhidharmakośa, Vinayasūtra] 並びにそれぞれの註釈書に関する試問を

受けたが、人々は彼のすばらしい解答ぶりに心を奪われた。理論では彼にかなう者もなく、人々に畏怖される程であった。ツェタンでの試問を終った時、ツォンカパの所へ論争に趣いたが、かえってツォンカパの人徳に深い信頼をよせ、その弟子になることとなった。

五六歳の年にツォンカパの後を踏襲して、第二代のガンデンティバ (dgañ ldan khri pa, ガンデン寺の官長) となった。

彼には次のような著作がある。

『量積頌』の解説、『解脱道を不顛倒に明らかにする』と『量決択』(Toh. No. 5450)

『量決択』の大註たる『密意善明』(Toh. Nos. 5453, 5454)

『量』正理滴』の註釈たる『善釈心髓の宝庫』(Toh. No. 5455)

『量経の解説』(Toh. No. 5437)

『般若波羅蜜多優婆提舍論現觀莊嚴』の註、いわゆる『明義』に対する解説、『藏莊嚴』と名づける書』

(Toh. No. 5433)

『大乘上恒特羅』に対する註』(Toh. No. 5434)

『入菩薩行の解説』仏子の彼岸』(Toh. No. 5436)

『中觀宝鬘』の要義を明らかにしむ』(Toh. No.

5427)

『四百頌』の解説『善釈精要』(Toh. No. 5428)

『阿毘達磨集の解説』善釈阿毘達磨海藏』(Toh. No.

5435)

ギャルツァブはツォンカパより七歳若く、ツォンカパを師と仰いでいたが、彼の弟子の殆んどはツォンカパの弟子でもある。ケートゥブもそのような弟子の一人である。ケートゥブがガンデンティバとなってほどなく、ギャルツァブは六八歳で死亡した。彼の亡骸は火葬されて、ガンデン寺のミイラにして保存されているツォンカパの遺体の右に安置されている。<sup>2)</sup>

## (二) ケートゥブ

第三代のガンデンティバ、ケートゥブ = ゲーレクパルサン (mKhas grub dGe legs dpal bzah, 1385-1438) は

ツァンテーのドクシェン (mDog gshun) に生れ、ラムテ  
ーパ = イーヒーバル (Lam hbras pa Ye ses dpal)、  
クンガギャルツェン (Kun dgañ rgyal mtshan)、レンダワ  
(Ren mdah ba) などに就いて、硯学となった人である。

一七歳の時、大学者ポトン = チョクレナムギャル (Bo

doñ Phyogs las rnam rgyal) を論破したと言われる。ランダワから比丘戒を受け、セラのチュェティン (Chos sdins) 学堂でツォンカバと出会ったが、その時既に、彼の胸中には、それ以後変わることなく抱きつづけた師への信頼の念は根づいていた。ギャルツァブや持律者タクパギヤルツェン (hDul hdsin Grags pa rgyal mtshan) にも教えを受けた。キャンツェ (Gyal tse) の町に、ラプテン = クンサンパクを施主として、パルコル = チェデ寺を創建した。

四七歳の年、ガンデンティバとなる。ジャムヤンチュェジ (前出、ツォンカバの弟子) は彼の弟子でもある。セラ寺やガンデン寺で多くの法を説いた。<sup>③</sup> 彼の著作の主なもの以下の如くである。

『般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴』の註釈たる『義明』の解説、『難解の光明』という書 (Toh. No. 5461) 『吉祥時輪の大註』無垢光』に対する広釈、『真性を照らす』という書 (Toh. No. 5463)

『三律儀略説決定論』、『牟尼教宝帯』という書 (Toh. No. 5488)

『総タントラ部建立広釈』 (Toh. No. 5489)

『大論たるプラマーナ・ヴールティカの広註』、『正理

海』のうち、『現量品の解説』 (Toh. No. 5505)

『甚深空性の真性を解明する論』、『賢劫開眼』という書 (Toh. No. 5459)

『一切のタントラの王吉祥秘密集の生起次第』、『利驗海』 (Toh. No. 5481)

『量七部の莊嚴』、『心の闇を除去す』という書 (Toh. No. 5501)

#### (三) 第四代ガンデンティバ

第四代のシャルワ = レクパギヤルツェン (Sha lu ba Legs pa rgyal mtshan, 1375-1450) は、ツァンに生れ、シャル寺で出家し、常用經典の導師を勤めた。ツォンカバに随行し、六四歳でガンデンティバとなる。<sup>④</sup>

#### (四) 第五代ガンデンティバ

第五代のロテチュェキョン (Blo gros chos skyon, 1389-1463) は、ツォンカバ、ギャルツァブ、ケートゥプの三師に就いて顕密二教の典籍によく通じていた。殊に時輪タントラにすぐれ、註釈を残している。六二歳でガンデンティバになった。<sup>⑤</sup>

(五) 第六代ガンデンティバ

第六代のパソニチェキギヤルツェン (Ba so Chos kyi rgyal mtshan, 1402-1473) は、ケートウブの弟として生れた。ツォンカバを初め諸師に就き六二歳でガンデンティバとなる。時輪タントラの生起次第と円満次第、中觀思想、ヤマーンタカの生起次第と円満次第という三つの教義の要点に関する著作などがある。弟子には、トゥブチェンニチェドルジェ (Grub chen Chos rdo rje)、センルンパニドルドルジェ (Sen lün pa dPal rdo rje)、カムペンニドルジェバル (Kams pa rDo rje dpa) という虹の体を獲得した不死の金剛三兄弟として知られる人々を初めとして多数いる。<sup>⑥</sup>

(六) 第七代ガンデンティバ

第七代のロテテンバ (Blo gros brtan pa, 1402-1478) は、ツォンカバとギヤルツァブに師事し、殊に弥勒の教えをよく学んだ。タクポタツァン寺を建立し、弥勒の五部論のうち、『現觀莊嚴論』を除く四部の輪と、『プラマーナ・パールッティカ』<sup>⑦</sup>とに註釈を行った。七二歳でガンデンティバとなった。<sup>⑦</sup>

(七) 第八代ガンデンティバ

第八代のモンラムパル (sMon lam dpaI, 1414-1491) は、パンチェンニゲドゥントウブやシェラブセンゲなどに師事し、ツェタンで三六冊の書に関する試問を受けたと言われる。六七歳でガンデンティバとなった。<sup>⑧</sup>『プラマーナ・パールッティカ』の註釈を著わしている。

以上、ギヤルツァブから第八代までの七人の官長は、「ツァン出身の文殊師利の化身として相続した七人」(hJam dbyans gtsah pa bdun bryud) として、歴代のガンデンティバの中でも、特に勝れたラマたちであるとされている。<sup>⑧</sup>

現在(一九八五年)のガンデンティバは第九八代に当る。詳細は、第七代までのことは、サンゲギヤムツォ (Sans rgyas rgya mtsho, 1653-1705) の『バイドゥールニセルポ』(Baidürser po) を参照された。<sup>⑨</sup> それ以後第五二代までは、ロンドルリンポチェ (Klon rdol bla ma Nag dban blo bzai, 1719-1805) の全集を、<sup>⑩</sup> それ以後は、例えば『ケツンサンポ』(mkhas btsun bzai po) の Biographical Dictionary of Tibet and Tibetan Buddhism, Vol. VI, pp. 94-269, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, 1981. 等を参照された。<sup>⑩</sup>

### 三 ゲルク派の主要寺院

#### (一) ガンデン寺

ゲルク派の本山ガンデン寺は関しては、「ツォンカパ略伝」の項で既に述べた。ここではその「学堂(タツァン)」のことを少し記すことにする。

ガンデン寺には、チャンツェ (Byan rtsed) とシャルツェ (Sar rtsed) の二つの学堂がある。チャンツェ学堂は、ホルテン = ナムカバルサン (Hor ston Nam mkhah dpal azan) を初代のチエジェ (Chos rje, 法主) とし、シャルツェ学堂はケートゥブを初代のチエジェとする。<sup>⑩</sup>

チャンツェ学堂では、セラジツェンバ (Se ra rje btsun pa) の造った教科書が用いられ、シャルツェ学堂ではパンチェンソタク (Pan chen bsod grags) の教科書が用いられている。それぞれの学堂には、出身地別に作られた地方寺院 (khan tshan) が所属している。ガンデン寺で学ぶ僧の数は従来、三、三〇〇人程と言われているが、一九五九年頃には五、〇〇〇人の僧がいた。

#### (二) レブン寺

レブン寺 (hBras spuñs) は、ジャムヤンチエジェ = タ

シバルデン (hJam dbyans chos rje bkra sis dpal Idan, 1379-1449) が、ツォンカパの要請によって一四一六年(一説には、一四一七年)に創建したチベット最大の学問寺である。

ジャムヤンチエジェは、一〇八冊の顕密の書を修得し誦んじていたと言われる。『中論』や『現觀莊嚴論』に関するツォンカパの書をよく講じ、ムセバ = ロテリンチェン (Mus strad pa Blo gros rin chen) などのすぐれた弟子を育てた。その中から七人に命じて講義を行わせた。それがもととなって七つの学堂ができたことになった。即ち、コヤン (sGo man) / ロサリン (Blo gsal glin) / チヤン (bDe yans) / シヤノル (Sag skor) / テサムリン (Thos bsam glin, 別名ゲム rGyas pa) / ドゥルワ (hDul ba) / ガクペ (sNags pa) の七学堂である。後には、コヤン / ロサリン / テヤン / ガクペの四学堂だけが残った。

レブン寺の歴代の官長には優れた学者が多くなる。ジャムヤンレクパチエジェル (hJam dbyans legs pa chos hbyor, 別名ジャムヤンガワイローテ hJam dbyans dgah bahi glo gros, 略してガロとも呼ばれる。1429 or 1430-1503 or 1504) は類いまれな学者であり行者でもある。その弟子の中からは、ギヤルワ = ゲドワンギヤムツォ (rGyal ba dGe

hdun rgya mtsho, 1475-1542. 二世ダライラマ)など優れた学者が輩出している。ガロは『大乘莊嚴經論』『現觀莊嚴論』『中論』『入中論』及び論理学によく通じてそれらの註釈を書いている。サキャ派のゴウォラプジャムパ (Go bo rab hbyams pa) がツォンカパを批判したのに対して、『ナムチャクノロ』(gNam lceags hkhor lo) という書を著わして、その批判を退けた。五三歳でゴマン学堂の学長となっている。

ガロの後、ヨntenギャツォ、ゲドゥギヤムツォ、パンチェン・ソナムタクパ、ギャルワ・ソナムギャツォなどが官長の位に就いた。<sup>⑧</sup>

パンチェン・ソナムタクパが、それまでレプン寺のロサリン学堂で用いられていたガロの教科書 (Yig cha) に代わる新たな教科書を造ってから、ロサリンの教科書は、ガンデン寺のシャルツェ学堂を初め、多くの学堂でも教科書として使用されるようになった。

パンチェン・ソナムタクパ (Pan chen bSod namis grags pa, 1478-1554) は、ラサの南、ツェタン (rtse than) で生れた。セルチュエ学堂では、ラマ・テンヨェパルデン・ヨンジンに師事し、ギョトエ寺ではドルジェチャン・チュエデントロテに就いて密教を学び、その官長を一四年間勤め

ている。ダライラマ二世からも教えを受け、一五二三年ロサリン学堂の学長になり、その後一五三五年にはガンデンティパに就任している。二世ダライラマの転生活仏である三世ダライラマに自分の名前の一部を与えて、ソナムギャツォと名づけた。七七歳で亡くなり、その舍利は、レプン寺に安置されている。

ゴマン学堂の教科書の著者クンケン・ジャムヤン・ヘバ (Kun mkhyen hJam dbyanis bshad pa Nag dhan brtson hgrus, 1648-1721) は、アムドのドメ (mDo smad) の生れである。

七歳の時に、比丘ソナムフントツブから文字の書き方を習い、一三歳の時に、イエーシェギャツォの許で出家し、沙弥となる。二一歳の時に中央チベットに出、その年にレプン寺のゴマン学堂に入る。それ以後、チャンキヤ・ガクワンチュェデン (Tsañ skya Nag dhan chos ldan) に師事し、二五歳の時、サンブで十難解学に関する試験を受けている。

三三歳の時、セギエ寺のドジェチャン・コンチヨクヤルペルが老齢のためにツォンカパから伝わる密教の口伝が途絶えることを嘆いているのを聞いて、その口伝を継承するために彼に就いた。

またプトンが校討した大蔵經の甘殊爾テキスト『ギヤルツェテンパンマ』(rGyal rtsehi them spans na)この書は現在その存在が確認されていない。一説には蒙古に存在すると言われる。)をよく読んだ。五三歳でゴマン学堂の学長となる。一七一〇年ドメの地にタシキル寺を建立した。後にはドメ地方で最も重要な寺院となった。

二世ジャムヤンシェパ、コンチョクジクメワンポ (hJam dbyaŋs bshad pa dKon mchog hjigs med dban po, 1728-1817) は、ドメの出身である。ゲシエガクワンテンジンなどに師事し、一二歳の時、チャンキャイェンシテンドトメ (lCañ skya Ye ses bstan pañi sgron me, lCañ skya rol pañi rdo rje の弟子) や、ギャルチョクニカルサンギャツォ(第七世ダライラマ) や、パンチェンニパールデンイェシユ(第三世パンチェンラ)などに教えを受け、ゴマン学堂の学長となった。

ゴマン学堂の初代学長は、トゥンタクパニリンチェンパであり、ロサリン学堂の初代学長は、ロポンニレンデンパであり、デヤン学堂の初代学長は、チョクパバルである。デヤン学堂はレブン寺の中では最も小さな学堂であり、僧の数も五〇〇名程度である。ここでは、第五世ダライラマの造った教科書を用いている。

ガクパ学堂の初代学長はギャルツェンニツルタイムであり、ドゥルワ学堂の初代学長は、トゥンツォントウタクパであり、シャコル学堂の初代学長は、ナルタンラブチョクパであり、ゲバ学堂の初代学長はロポンニクンサンリンチェンである。

### (三) セラ寺

セラニテクチェンリン (Se ra theg chen glin) は、ツォンカバが曾て、この地で般若經の言葉が金色の文字となって空中に現われたのを見て、大きな僧伽ができるであらうことを予言した通りに、彼の弟子チャムチェンチユジエニシャキヤイェンヒ (Byams chen chos rje Sa kya ye ses 1354-1435) が一四一五年に創建した。

チャムチェンは、ツアル地方のグンタン (Gñi than) に生れた。彼は、ツォンカバが明の成祖永楽帝に招かれた時、ツォンカバに彼の地に行くことの無益なこと、のみならずチベット仏教にとってかえって損失の方が大きいことを進言し、師の代理として自ら北京に趣いた。

北京では種々の神通を示したり、皇帝が病気の時には彼に灌頂を授けてその病を治したりした。また五台山にゲルク派の寺院を建立した。彼が帰国する時、永楽帝は

中国で初めて開版されたチベット大蔵經(永樂版、甘殊爾部)や十六羅漢像や釈迦像などを贈呈した。それらは、セラ寺の宝物として保存されている。彼は再び永樂帝に招かれ北京に趣いたが、その帰途、彼の地で客死した。<sup>15)</sup>

彼の後にセラ寺の官長には、ジエニタルケサンポ、ダニルニギヤルツェンサンポが着任した。その後、カンテイルニシャルラプチャム、ローテリンチェンセンゲが官長に就任し、中觀の教科書などを造ったが、後にジエツンニチエキギヤルツェン(Chos kyi rgyal mtshan, 1469-1544)の教科書が出されるに及んで用いられなくなった。その後には、ネテンパ、ヘプチェジエ、ニヤルテンニパールジョルフントゥブ (gnal ston dPal lhyor lhun grub, 1561-1637、彼はシヤキヤチョクデンを論破したと言われている。ツォンカバの『了義未了善善説真髓』に対する註釈を著わしている)、マンテニパールデンローテ、ジャムヤンニテンイエパルデン、ギオルワニゲドウンギヤルツォ、ジエツンニチエキギヤルツェン、パンチェンニソナムタクパ、チェタサンポ、ギヤルワニソナムギャツォ、トンコルニヨntenギヤツォ、ギヤルワニヨntenギヤツォ、パンチェンニチエギヤン、ギヤルワガパチェンポ、ギヤルワニツァン、ヤンギヤツォなどがその位に就いた。セ

ラ寺は古くは、ギャ学堂 (rgya gra tshan) とロムテン学堂 (hBrom stei) とメ学堂 (sMad) とトニ学堂 (sTod) との四学堂より成っていたが、ギャとロムテンの二つはトニ学堂に吸収され、その後最終的には、セラメ (Se ra smad) とセラチニ (Se ra byes) とセラガクパ (Se ra snags pa) の三学堂となった。セラメというのはその地名からきた呼称であり、正式にはテンサムノルウーリン (Thos bsam nor buhi glin) と云う。

セラチニ学堂は、ツォンカバの弟子であるクンケンローテニリンチェンセンゲ (Kun mkhyen blo gros Rin chen sen ge) によって創建された。彼はニンマ派の行者の子として生れ、中央チベットに出てツォンカバの教えを受けた。實際上の師はゲドゥントゥブ (第一世ダライラマ) である。更にジャムヤンチエジエにも師事した。最初レプン寺で学んでいたが、彼の学徳を妬む者が多くなったために、一〇〇名ほどの弟子たちと共にセラ寺に移ったのである。セラ寺の僧たちの最上座に迎えられて座した時、チャムチェンチエジエが中国から持ち帰った十六羅漢像の一つが彼に歓迎する言葉をかけたと言い伝えられている。セラ寺の各堂から多くの比丘たちが彼の許に集まったので、彼の創建したセラチニの学堂は、別名



チエケマン (Byes mkhas man, 学者の多いチエ学堂) とも呼ばれる。

セラチエ学堂の教科書の著者セラジエツンバ<sup>⑤</sup>チエキギャルツホン (Se ra rje btsum pa Chos kyi rgyal mtshan, 1469-1544) のことを簡単に紹介しよう。彼の名は、彼の母がケートゥプの弟バソ<sup>⑥</sup>チエキギャルツェンを礼拝しに出かけた折に、バソが彼女に、やがて生れてくる子供に自分と同じ名をつけるようにと告げたことに因んで命名されたと言われている。六歳の時にゲドゥントゥプとチエジエ<sup>⑦</sup>パールジョルギャルツェンの所で命灌頂を受けている。

彼は最初タシルンポで学んだ。セラメ学堂ではクンケン<sup>⑧</sup>チエジョルパールサンに就いた。その後中央チベットに出て、セラ寺に入り、セラチエ学堂のテンイエバルデンに就いて、四難解学の註釈などを学んだ。彼には勝れた四人の弟子がいる。

般若学の方面では、ケートゥプ<sup>⑨</sup>シヤムパティがいる。中観学ではジエトウン<sup>⑩</sup>シエラプワンポが、論理学ではタナク<sup>⑪</sup>ゲドゥンロサンが、戒律学ではパンチェン<sup>⑫</sup>デレクニマが、それぞれ勝れており、各々その分野の教科書の著者でもある。

ガクバ学堂はもと蒙古皇帝ラサン汗(拉藏汗)の息災を祈る礼拝堂であった。はじめ蒙古出身の僧たちは、夏は北部チベットで過し、冬はラサで暮していたが、セラ寺の集会堂が古くなり傷んだために新築されることとなり、ラサン汗がそれを建立することとなった。新しい集会堂へ移した残りの仏像などと共にこの古い集会堂は蒙古出身の僧たちに与えられ、ガクバ学堂と名づけられることとなった。この学堂では主として、密教の儀軌が実践されている。

#### (四) タシルンポ寺

ツァンのシカツェの近くにあるタシルンポ寺 (Dkya sa lhun po) は、一四四七年にツォンカパの弟子ゲドゥントゥプ (Ge dūn grub, 後に第一世ダライラマとなる) によって建立された。この寺は論理学の盛んなことで知られている。ゲドゥントゥプに次いでパンチェン<sup>⑬</sup>サンポタシが官長となり、以後、パンチェン<sup>⑭</sup>ルンリクギャツォ、パンチェン<sup>⑮</sup>イエシエツェモ、ギャルワ<sup>⑯</sup>ゲンドゥンギャツォ、ガリハツン<sup>⑰</sup>テンピニマ、パンチェン<sup>⑱</sup>シヤンティパ<sup>⑲</sup>ローテーギャルツェン、パンチェン<sup>⑳</sup>テンイエギャツォ、シャンテン<sup>㉑</sup>ローテーレクサン、ネニン

チユジュニチユキギヤルツェン、シャントテンニサントツ  
プバルサン、ニヤンテンニダムチヤルペル、ニヤンテ  
ンニハワンローターが順次その位に就いた。<sup>17)</sup>

その後にはローサンチユギヤン (Blo bzai chos rgyan,  
1570-1662) が就位したが、彼以後タシルンボ寺の官長は  
前任者の化身(活仏)とされるようになり、パンチェンを  
名のことになった。彼はラマ供養や道次第樂道 (Dde  
lam) のための読誦經典作成に勝れており、彼の造った經  
典はゲルク派の中に広く普及している。

二世パンチェン活仏にはローサンイェシユ (Blo bzai  
ye ses, 1663-1737) が就任した。彼の造った道次第迅速道  
の經典はこの派の中でよく用いられる。三世はペルデ  
ンイェン (dPal Idan ye ses, 1738-1780)、第四世はテン  
ジュニ (Dstan pañi ni ma, 1782-1853)、第五世はテンジュ  
ンチユク (bsTan pañi dban phyug, 1855-1882)、第六世は  
チユキニ (Chos kyī ni ma, 1883-1937) であり、現在第  
七世のチユキヤルツェンニティンレフントツプ (1938-  
 ) が位に就いている (京北在住)。

(五) キュメ寺

キュメ寺 (rGyud smad) はツォンカパの弟子シエラプ

センゲ (Ses rab seh ge, ?-1445) によって創建された。ギ  
ユテ寺 (rGyud stod) と共にラサ市内にある密教の専門  
道場である。この二ヶ寺から交替でガンデン寺の官長を  
出すことになっている。

シエラプセンゲは、ツァンテの地に生れ、ナルタンで  
出家した。中央チベットに出て、はじめはロントン (Roh  
ston, サークヤ派の人、ツォカパの批判者として知られる) に  
就いたが、後にツォンカパやドウルジン、ギャルツァブ  
に師事し、中観・般若・論理などを学び、ロントンの教  
えを捨てた。後にケートツプから時輪タントラなどを学  
んだ。ツォンカパからは、秘密集会タントラに関する月  
称の註釈に対するツォンカパの復註 (Toh. Nos. 5282-5284)  
や、五次第の註釈 (Toh. No. 5302) や勝樂タントラの註  
釈 (Toh. No. 5316) や時輪タントラやヘーバジュラタン  
トラなどを聞いた。その中でも、秘密集会タントラが最  
も彼の興味をそそった。<sup>18)</sup> 一四一九年セラ寺に滞在してい  
たツォンカパは、法要の席上で弟子たちに彼の密教の後  
継者となる者がいるか否かを訊ねた。再度同じことが訊  
ねられたが、後継者になりたいと申し出る者は誰もいな  
かった。そこでシエラプセンゲが、その役目をひき受け  
たいと申し出た所、ツォンカパは非常に喜び、彼の所持

していた秘密供養に用いるカパーラ(頭蓋骨でできた器)や、秘密集会の黄金の仏像や、秘密集会タントラ月称註に対する彼の復註や、その他種々の密教の典籍や儀軌に用いる仏具を与えた。<sup>⑩</sup>

シェラブセンゲの弟子には、ゲドゥントupp(後の第一世ダライラマ)などがある。またツァンの地にセギェン(Srad rgyud pa)という密教寺院を建立している。その後、官長の位をバルデンサンポ(dPal ldan bzah po, 1402-1473)に譲り、ツォンカパから授けられた秘密集会タントラの復註も彼に与えて諸寺を遍歴した。後年セギェン寺からジャムヤンシェン(hJam dbyans bshad pa, 1648-1721)などの勝れた学僧が輩出していった。<sup>⑪</sup>

(六) ギョテ寺

ギョテ寺(rGyud stod)はクンガテントupp(Kun dgeñ don grub, 1419-1486)によって、一四七四年に創建された。クンガテントuppはツァンに生れ、ナルタンで出家した。ゲドゥントuppやシェラブセンゲに就いて密教を学んだ。<sup>⑫</sup>

註

① Klon rdol gsun ñbum (The Collected Works of Longdol

Lama, New Delhi, 1973) Za, 1161, 4 以下参照。

- ② Bairürser po, 60, a, 3.  
 ③ *ibid.*, 61, a, 4.  
 ④ *ibid.*, 62, a, 6.  
 ⑤ *ibid.*, 62, b, 2—63, a, 1.  
 ⑥ *ibid.*, 63, a, 1.  
 ⑦ *ibid.*, 63, b, 1.  
 ⑧ *ibid.*, 63, b, 6.  
 ⑨ *ibid.*, 50, a, 3.  
 ⑩ Klon rdol gsun ñbum, Za, 1171, 5—1175, 4.  
 ⑪ *ibid.*, Za, 1176, 1-4.  
 ⑫ Thupñ bkwan grub mthah, 44, b, 4—45, b, 4.  
 ⑬ Grwa sa chen po bshi dan rgyud stod smad chags tshul (Collected Works of Phur bu lcoḡ Nag dhan byams pa, New Delhi, 1974), Be, 29, b, 3—33, a, 3.  
 ⑭ Thupñ bkwan grub mthah, 46, a, 4—47, a, 6.  
 ⑮ Grwa sa chen po bshi dan rgyud stod smad chags tshul, 34, b, 3—35, b, 1.  
 ⑯ *ibid.*, 36, a, 1—6.  
 ⑰ Thupñ bkwan grub mthah, 48, a, 6—b, 4.  
 ⑱ Grwa sa chen po bshi dan rgyud stod smad chags tshul, 56, a, 5—b, 3.  
 ⑲ *ibid.*, 56, b, 6—57, a, 4.  
 ⑳ *ibid.*, 57, b, 1—58, a, 6.  
 ㉑ *ibid.*, 59, a, 6—60, a, 6.  
 ㉒